

1 5 生活

岡崎市立羽根小学校 三浦 理沙

2 研究テーマ

生活科を中心とした「学校がすき」を生むスタートカリキュラムの追究

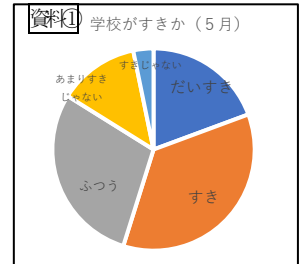
— ひと・こと・ものとの出会いや関わりによる 小学校への円滑な接続を目指して —

3 研究概要

(1) はじめに

入学式後、担任である私の前には、たくさんの保護者が列を成し、明日から始まる学校生活への心配や不安が多く聞かれた。入学式が、期待より不安に覆われていることを少し寂しく感じた。1年生が、小学校の生活になじめず、心が落ち着かない状態になったり、登校しぶりをおこしたりすることは少なくない。これを表す「小1プロブレム」という言葉もある。これを踏まえ、学習指導要領生活編には「スタートカリキュラム」（小1プログラムなどの問題を解決し、学校生活への適応を進めることを期待したもの）の実施が明文化され、方策の一つとして「好事例の収集」が挙げられている。小学校に円滑に接続することを目的とした実践や手だてを考察したり、検証を進めたりしていくことは急務であると考えた。

本学級は、登園をしぶっていた児童や、入学式に泣きながら来た児童など、入学時から登校しぶりの懸念が非常に強い学級であった。入学してから1か月ほどは、欠席や遅刻なく、始業時間に全員が揃わない苦しいスタートであった。5月に学級で「学校がすきか」を調査すると、約半数は「すき」と答えた一方、「あまりすきじゃない」「すきじゃない」という回答が目立った資料①。理由をきくと「お母さんといたい」という母子分離不安や「勉強の時間が長くて嫌だ」といった小学校の生活リズムへの不適応が見受けられた。子どもたちには、これらの思いをなるべく軽減し「学校は楽しい」という前向きな感情を増やしてあげたい。「できた！」から「もっとやりたい！」につながる体験をさせてあげたい。そして、それをかなえるための最大の手だてが、スタートカリキュラムの計画・実施にあると考える。



これらの思いから、本研究では、生活科を中心としたスタートカリキュラムの開発を目指し、研究主題を「生活科を中心とした『学校がすき』を生むスタートカリキュラムの追究」とした。学習指導要領においても、生活科を核とした総合的な指導の推進が求められており、遊びを通して学ぶことができる教科だと考えたからである。また、副題は「ひと・こと・ものとの出会いや関わりによる小学校への円滑な接続を目指して」とし、2つの単元を設定した。1つ目は「がっこうだいすき」の単元である。基本的な学校生活のルールや習慣の習得を目指すオリエンテーションから、学校にある人やもの、出来事との出会いをデザインしていく。2つ目は「あきとなかよし」の単元である。秋の自然物との出会いを楽しんだのち、毎年12月ごろに行われる近隣園との交流会に向けて、年長さんのために「あきのテーマパーク」を準備する。これらの単元は、1年生の生活科において特に「ひと・こと・もの」と出会い、関わることができ、子どもたちの心にも記憶にも残る単元であると考えた。本研究を通して、「がっこうがすき」と笑い、自信をもって生活を豊かにする子どもを増やし、スタートカリキュラムの活用における有効な手だてを明らかにするため、児童の思考や姿の変容をもとに研究を進める。

(2) めざす児童像

- ①【安心感の獲得】「学校がすき」と感じ、安心して毎日明るく学校に通う児童
- ②【自己肯定感の獲得】対象に心を動かし、自信をもって生活を豊かにする児童

本研究における「心を動かし」とは、「やりたい」が溢れる姿を指し、想いや願いをもち表現しようとする姿と定義する。

(3) 研究の仮説と手立て

仮説1 【安心感の獲得のために】園からの申し送りや教育相談から、就学時の適切な実態把握をし、それを受け継ぎ、発展させたカリキュラムマネジメントを実施することで安心して学校生活をスタートすることができるだろう。

【手だて①】幼稚園・保育園との連携・実態把握

近隣園との幼保小連絡会や、教育相談で子どもたちの抱えている不安感や、保護者が抱く心配事を適切に把握する。また、園で取り組んだ制作や学習を聞き取ったり、入学後の様子を伝えあったりすることで連携できるようにする。

【手だて②】「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」をもとにした、スタートカリキュラムの計画と実施

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」は、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」の改定に伴い、文部科学省が示したものである。資料②これ評価軸とすることで、幼児教育と小学校教育の接続・連携強化を図ることを目的としている。入学後しばらくは、学習活動をこれらの姿にあてはめ、スタートカリキュラムを構成することで「ゼロからのスタートではない」ことを明確にし、幼児期で身に着けた力を小学校生活に発展させることができるようにしていく。

- 資料② 「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」
- ①健康な心と体 ②自立心
 - ③協同性 ④道徳性・規範意識の芽生え
 - ⑤社会活とのかかわり ⑥思考力の芽生え
 - ⑦自然とのかかわり・生命尊重
 - ⑧数量や図形・標識や文字などへの関心・感覚
 - ⑨言葉による伝えあい ⑩豊かな感性と表現

【手だて③】 ペア児童の固定化

母子分離不安など、学校生活に不安感を抱く児童にとって、安心して過ごすことのできる人間関係構築は大きな悩みの一つである。そこで単元の中で、1年間ペアとして交流する6年生児童や、交流する年長児を固定し、「この子がいれば大丈夫」「この子のためにがんばりたい」といった安心感をもたせたい。

仮説II【自己肯定感の獲得のために】ひと・こと・ものと意図的に出会い、心が動く学習活動を展開することで、成功経験を増やし、自己肯定感を高めることができるだろう。

【手だて③】 ひと・こと・ものと意図的に出会う生活科単元の展開

本実践では、内容項目「(1) 学校と生活」と「(6) 自然や物を使った遊び」の学習を中心とし「(9) 自分の成長」につなげていく。それぞれの単元で、ひと・こと・ものとの出会いの場を意図的に工夫し、学習への入り口とする。

【手だて④】 想いや願いの言語化・視覚化

単元の中で「どうしたい」「なにがやりたい」など、子どもたちの想いや願いを言語化する。それを「鯛」の掲示を用いて「●●したい」の話型で書くことで視覚化し、導入で抱いた想いや願いに愛着をもって活動できるようにする。

(4) 抽出児童について

児童A…思いやりがあり、学習能力も高い。何事も丁寧に集中して取り組む。一方で、入学前は登園しぶりが毎日続いており、本人も母親も過剰に不安感を抱きやすい。マイナス発言が目立ち、やる前から「できないと思う」と、涙を流して訴える場面も多い。異性との交友関係は拒絶し、特定の同性としか関わることができない。本実践を通して、自分の能力に気付き「学校はたのしい」と笑い、円滑に小学校生活をスタートさせてほしい。様々な友達と関わり合い「きっとできる」という自信を身に付けてほしいと願う。

4-1 実践

(1) 4月7日(金)～14日(金) 登校1～6日目

登校初日の児童Aは、泣かずに教室まで登校することができた。しかし、通学班のお世話係である6年生から離れることができず、横についてもらいながら、朝の支度をすすめた。児童Aの母親からは、泣きながら家を出たこと、門まで母親と登校したことを電話で報告を受けた。

週が明けた登校2日目、靴箱で母子分離ができず、時間通りに登校ができなかった。理由を尋ねると「名札を上手につけたり、とったりできるか心配」と、ネガティブな発言が目立った。そこで6年生に名札をつけてもらうことを提案すると、すんなりと受け入れ、入室することができた【手だて③】。その後は落ち着いた様子で、遊具の使い方など、学校生活のルールを学習することができた。下校後、母親に様子を尋ねると「楽しかったよ」と笑って帰ってきたという報告を受けた。この姿から、母親以外に安心できる相手を、学校の中に作りつづける必要があるといえる。

資料③ 導入の授業録

T 今日、えんぴつをわかっていきましょう。えんぴつはなができるかな
児童C等 (口々に) かける! 絵かきを書くのがえんぴつ!!
T 幼稚園保育園で、鉛筆使ったことあるよ! ついでう人 はー!!
児童A (挙手)
児童D 幼稚園で名前とかかいたことあるもん!
T それか、小学校こくまから鉛筆をつかったことあるかな? すこ!
やったことある子は、その時ことを思い出しながらやってみようね



資料④ よい姿勢の児童A

登校3日目、鉛筆で書く学習を始めるにあたり、45分間の授業を「20分(学習①)→5分(休憩)→20分(学習②)」の3コマに分けたモジュール形式とした【手だて②】。導入で園での経験を尋ねると、児童Aは控えめに手を挙げた【資料③】。児童Aは、近隣園の中でも早期から学習活動を取り入れている園出身である。園での経験を認め、本時につなげる声掛けをする【手だて②】と、【資料④】にあるように、よい姿勢で、自信をもって取り組む姿を見ることができた。

資料⑤ 児童Aとの対話録

T 「児童A」ちゃん、ご自分のおざらびかびか! すてね、きれいだね!
児童A △△ 毎週毎週先生が、ご自分の中での掃除してるから、残ったおざらびかびか、さっさと掃除して、きれいにしてる!
T 「みなこと保育園で勉強してんだね」



資料⑥ 初めての食卓の児童A

登校6日目、入学して1週間が経過し、児童Aは学校に慣れてきた。しかし、引き続き下駄箱まで母親が付き添っている報告を受けていた。この日の給食開始に向け、食育絵本の読み聞かせを行い「好き嫌いなく食べることの大切さ」「給食を作ってくれる人への感謝のきもち」を学習した。児童Aは、保育園までで身に付けた食育の知識を得意げに話したため、価値づける声掛けをした【資料⑤】【手だて②】。また、その知識を学級全体に共有したことで、児童Aは最後の一粒まで一生懸命に食べることができた【資料⑥】。これは「幼児期の終わりまでに育てたい10の姿」のうちの「健康な心と体」「道徳性・規範意識の芽生え」として身に付けてきた知識が、小学校生活に応用され、それを自覚することができた瞬間であった。引き続き、園での学びを小学校に結び付け、自覚させる声掛けを続けていく必要があるといえる。



資料⑦ ペアの6年生と交流する児童A

(2) 生活科第1時 「はじめまして 6年生」

5時間授業になって1週間が経過した。生活科「がっこうだいすき」の導入として、6年生交流学級とのレクリエーションを行った。事前に、1年間継続し交流していくペア児童を決め、顔合わせを

行った【手だて③④】。児童Aは、男子児童との関わりに苦手感があるため、世話好きで優しく親切な声掛けができる6年女子児童aをペアとした【資料⑦】。プレゼントをもらったり、一緒に遊んだりする中で、ペア児童に話しかけられると笑顔を見せ、安心感をもたせることができた。助けてくれる味方を増やすことにつながったといえるだろう。

(3) 第2・3時 「2年生とがっこうたんけんにいこう」

第2時からは、学校探検の学習を開始した。まずは、交流学級の2年生に案内してもらい、1回目の学校探検を行った。【資料⑧】は児童Aの様子と、対話記録である。不安感が強い児童Aにとっては、心配事が尽きない時間であったことが伺える。一方で、対話記録の「がいこつの隣にあったロボット」とは、昨年の幼保小交流会で当時の1年生と遊んだロボットである。児童Aは「前にあそんでもらったやつ。光るし動くんだよ。」と隣にいた女子児童Bに教える様子が見受けられた。これらの様子から、児童Aにとってこの探検が、心配ごとだけでなく驚きなど様々な感情とともにあったことが伺えた。



T 今日の探検 どうだった?

A 楽しかった。ペアの男子児童からあつと布くで貰ってきた

T 「も僕かったでしょ、何見えた?」

A がいこつもつとこわくてびっくりしちゃった。あと料理の部屋見けど、男の先生から貰ってきた。(中略)

A 「も、がこつ隣にあったロボット、幼稚園見たことあるから、びっくりした」


T おお、よくおぼえてるじゃん、まあよかったね

【資料⑧】 2年生と学校探検をする児童Aと振り返りの対話記録
【資料⑨】 去年の交流会遊んだロボット

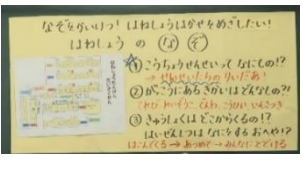
(4) 第4～13時 「2つのミッションで めざせ! はね小はかせ」

2年生との学校探検を終え、今度は自分たちだけで探検に出かけることを伝えた。探検には、2つのミッションを設けた【手だて④】。1つ目は「羽根小にある部屋・ものに詳しくなること」、2つ目は「羽根小で働く人の秘密を見つけ出すこと」である。1つ目のミッション達成のために、児童Aは職員室への探検を計画した。職員室の中から校長室に行くことができる「ひみつのみち」があることに気づき、発表することができた。周りの児童から「知らなかった」という反応を受け、児童Aは誇らしげに探検を終えることができた。


1つ目のミッションを終え、先生インタビューの計画を開始した。導入では、写真と名前、一言コメントを一緒に掲載した「はねしょうのせんせいずかん」を作成し、提示することで「ひと」との出会いの場を展開した【手だて④】【資料⑨】。それを見ながら、児童Aは校長先生へのインタビューを計画した。本校の校長は男性で、男性との関わりに不安感をもつ児童Aにとっては「校長先生に会いたい」という想いを抱いたことが大きな成長であった。これは、1つ目のミッションの振り返りで、子どもたちから出てきた1番多くの疑問「校長先生は何者か」という問いと、それをもとに制作した掲示【資料⑩】【手だて④】が影響していると考えられる。児童Aは、何度も練習を重ね、緊張しながらも「失礼します」と大きな声で挨拶をして入室し、ペアの児童と一緒にインタビューをすることができた。控えめな児童Aは発言することはできなかったが、ふりかえりから、先生たちは「たのしくやっている」ことや先生という仕事や存在の大きさに気づき、「学校」という場所への関心や愛着を高めることができた【資料⑪】。



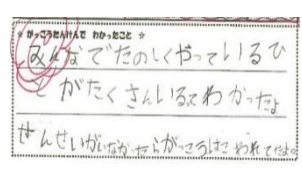
【資料⑩】 先生写真を見る児童A



【資料⑪】 単元を貫く問、視覚化した掲示



【資料⑫】 大きな声で挨拶をする児童A と ふりかえりの前説



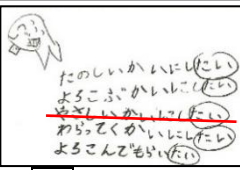
4-2 研究の実践と考察 (「あきとなかよし」)

(1) 第0時 単元導入前の抽出児の状況


「がっこうとなかよし」の実践を終え、11月になった。生活科では「めざせ! しゃぼんだマスター!」「2年生とスイカわり大会」「6年生と水あそび」など、季節に合わせた単元を設定し、ペアの異学年と関わる機会を積極的に設けた【手だて③④】。2学期に入ると、児童Aは母親と1つ目の横断歩道で離れることができるようになった。1学期末に「学校がすきか」を尋ねると、約7割の児童が「好き」と答えた。一方で、児童Aは「ふつう」の回答にとどまっていた。そこで、12月に行われる幼保小交流会の開催を知らせ「お姉さんとして年長さんをおもてなしする」という単元目標を設定した。交流する園は、児童Aの出身園である。相手意識を明確にもち、想いを表現することで、さらなる成長を見せてほしい。

(2) 第1時 「きいぐみさんおもてなし大きくせんをたてたい!」

第1時は「どんな会にしたいか」という問いに「鯛」の掲示を用いて想いや願いを記述した【手だて⑤】。児童Aは「やさしいかい」と表現した【資料⑫】。心配性な児童Aにとって「優しい」という言葉が重要な意味をもつようである。その後「何をしてあげたいか」という質問をもとに話し合い「学校案内」と「4くみまつり」を開催することになった。「4くみまつり」は、この時点では、輪投げや射的など一般的なおもちゃの名前を挙げる児童が多く「あきのおもちゃ」という言葉は出てこなかった。次時以降、まずは自分たちが「秋」という対象に存分に浸り「これでおもてなししたい」という想いを引き出せるような声掛けが必要だといえる。



【資料⑫】 児童Aの振り返り



【資料⑬】 児童Aの制作したカキツネ

(3) 第2時 「あきのたからものをあつめたい！」

第2時は、国語科「なにに見えるかな」との合科的な指導として、秋見つけをした【手だて②】。導入で児童Aは「幼稚園でイチヨウのキツネを作った」と答えた。これは、10の姿の「⑦自然とのかかわり・生命尊重」を身に着けている姿である。児童Aは園の経験を想起し、落ち葉でキツネを作って見立て遊びをすることができた【資料13】。

(4) 第3～7時 「あきのおもちゃであそびたい！」

前時まで集めた落ち葉や木の実を「あきのたからもの」とし、【資料14】のように、掲示することで対象への愛着を高めた【手だて④】。中でも子どもたちが最も興味を示したのはドングリである。形で名前が違うことに気付いた子どもたちは「シュッとたけのこマテバシイ」「ちびっこコナラ」「でぶっちょクヌギ」など愛着をもって名称を決めて呼び始め、対象への愛着を高めることができたようにした【手だて③】。

第3時からは、担任が「どんぐりゴマ」遊びを提案した。導入で「どんなコマにしたい？」と尋ねると、児童Aは「きれいにまわるコマにしたい」と発言し、鯛の掲示に記述することができた【手だて⑤】。その後、様々なドングリを手に取り、こだわりをもって活動する姿を見ることができた。近くにいた男子児童からの問いかけにも笑顔で答え、会話を続けることができた【資料15】。「どんぐりごま」という対象が、男子児童との関わりに不安感が強い児童Aを救ってくれた瞬間であった。授業後に「お話をできてたね」と称賛すると、児童Aは笑顔を見せた。この経験を自信につなげていきたい。



資料14 秋のたからものを掲示したもの(右)とどんぐりのキャラクター(左)

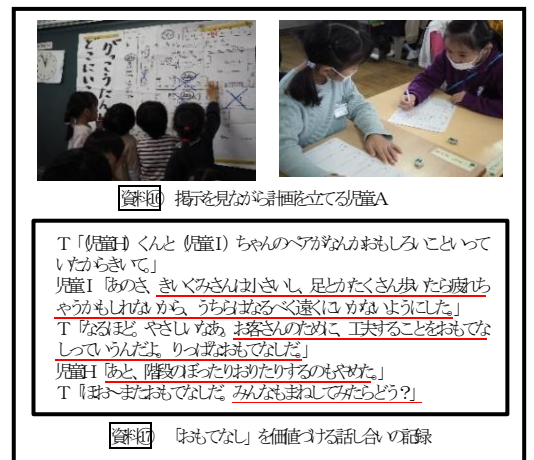
第5時からは「あきのたからものでもっと楽しいおもちゃができないかな」と尋ねると、「スズカケノキの手裏剣」や「ナンキンハゼをおコメにした秋のお弁当」など具体的な植物の名前を交えて、様々な遊びのアイデアを出した。これは、これまで出会った対象への関心や理解、愛着を大いに高め、生活を豊かにしようとする姿と見受けられる。そのアイデアをもとに、第6・7時では実際に秋のおもちゃづくりの続きを行った。児童Aはどんぐりマラカスを制作し、秋に親しもうとする姿を見ることができた。



資料15 どんぐりゴマを男子児童と関わる児童A

(5) 第8～14時 「きいぐみさんを おもてなししたい！」

前時まで、まずは自分たちが「秋」という対象に存分に浸ることができた。そこで第8時からは交流会の準備を開始した。年長児の名前を事前に聞き取り、準備段階からペアを組む年長児を固定して、学校探検の準備を進めた【手だて③】。校内地図を黒板に掲示すると、子どもたちは前に集まり、児童Aは「保健室→音楽室→校長室→家庭科室」の順に案内することを計画した【資料16】。【資料17】は、活動途中の話し合いの記録である。「きいぐみさん(年長児)が疲れなように近くの教室にする」という発言を取り上げ「おもてなし」という言葉で価値づけた【手だて④】。これは「きいぐみさん」という相手意識をもち、相手のために準備する望ましい姿だと考えたからである。話し合いを終えた児童Aは「保健室→校長室→家庭科室→音楽室」に回る順序を入れ替えた。友達発言に耳を傾け、相手を思いやり、おもてなししたりしようとする考えを身につけることができた。



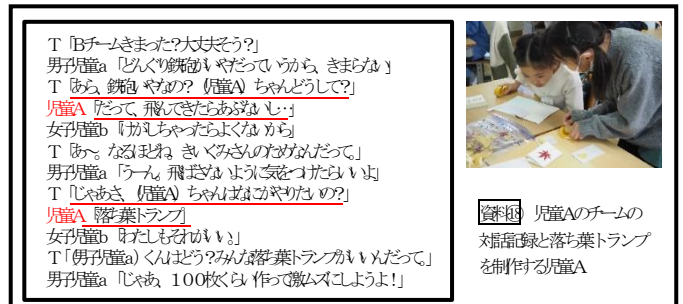
資料16 掲示を見ながら詳細を話している児童A

T「(児童B)くんと(児童C)ちゃんの名が読みかえもしみじことって
いたからきて、
児童I あさき きいぐみさんおかし、足かたくさんあたらあぢ
やかもしねから うちあななるへ遠くはかなよつした
T なるほど やさしいなあ、お客さんのために工夫することをおもてな
してらんだよ、りっぱなもてなした
児童H あと、隣あもてなしたのりたりのもてなした
T じゃあおもてなした、みんなお話ししてたらどう？」

資料17 「おもてなし」を価値づける話し合いの記録

第10時からは「4くみまつり」の準備を開始した。導入で「どんなおもちゃを用意したい？」と問うと【手だて⑤】、秋のおもちゃばかりが上がっていることがわかる。そこから「一緒にそれをやったほうがいい」と、想いや願いを発言する児童の姿が見られ、「4くみまつり」は、子どもたちの想いから「4くみいいね！あきまつり」へと姿を変えた。「いいね！」は学級の級訓で、子どもたちの合言葉である。

第11時からは、男女2人ずつの4人チームを組み、計画と準備を進めた。児童Aのチームには「絶対にどんぐり鉄砲がやりたい」と主張し、考えを曲げようしない男子児童aがいた。「なにがしたい？」「どうして？」など、想いや願いとその理由を引き出す発問をした【手だて⑤】ことで、控えめではあるが、自分の想いを言葉にして、男子児童aに伝えることができた。また「飛んで来たらあぶない」年長児を思いやる発言を聞くことができ、「年長児をおもてなしする」という意識や対象に愛着をもって関わろうとする望ましい姿を見ることができた【資料18】。他の女子児童が賛同してくれたことで、落ち葉トランプに決まり、児童Aの表情は明るくなった。



資料18 児童Aのチームの姉妹と落ち葉トランプを制作する児童A

T「チームきまつた？大丈夫？」
男子児童a「どんぐり鉄砲もやだつてうから、きらなな」
T「あ、鉄砲やだの？(児童A)ちゃんどうして？」
児童A「だつて、飛んで来たらあぶないし」
女子児童b「かえちやぶらよくなかな」
T「あ、なるほど、きいぐみさんのおめかだつて」
男子児童a「うん、飛ぶのはよくてあをこたえたいし」
T「じゃあさ、(児童A)ちゃんあはなこやりの？」
児童A「落ち葉トランプ」
女子児童b「たしむおめい」
T「(男子児童a)くんはどう？みんな落ち葉トランプかいいんだつて」
男子児童a「じゃあ、100枚くらい作って散らそうよ！」

(6) 第15・16時 「きいぐみさんと なかよしかいをしたい！」

12月、準備を終えて本番を迎えた。児童Aは、事前に園に先生と連携をとり、女子園児とペアになるように図らった【手だて①】こともあり、ペアの年長児aと会うとすぐに手をつなぎ、視線を合わせて自己紹介することができた。その後も、計画通り保健室に連れていくと「失礼します」と大きな声で挨拶をし「けがをしたら助けてくれる先生です」と養護教諭を紹介することができた。話すときには、常に女子園児aの顔を覗き込むように話し、表情をうかがっているように見えた【資料⑱】。これは相手が喜んでくれているか不安ながらも、頑張ろうとする児童Aの気持ちの表れであったといえるだろう。

学校探検を終え「4くみいいね!あきまつり」が始まった。「あたりとはずれのトランプ屋さん」と名付けられた児童Aのチームは、開店直後からたくさんのお客さんが訪れた。年長児がトランプをめくるたびに「これはイチョウ。これはイロハモミジ」と植物の名前を指さしながら教える姿は、落ち葉という対象に対しても理解や愛着を深めている姿とみることができた。控えめな児童Aではあるが、途中お客さんの数が減ると、活発な友達に誘われて店の前に立ち「いらっしやませ!たのしいよ!」と大きな声で集客をしようとする姿も見ることができた【資料⑲】。安心して一緒に活動できる友達と出会い、自分の想いや願いを実現しようとする、児童Aの望ましい姿を見ることができた。会の最後には、年長児の「あたりとはずれのトランプ屋さんがおもしろかったです」という言葉を聞き「やった!」と小さく跳びあがる児童Aの姿があった。達成感を味わいながら、頑張った自分の成長を感じていることと見受けられた。



【資料⑱】 ペアの年長児aと手をつなぎ、覗き込むように話す児童A



【資料⑲】 葉の名前を教える児童A (左) と集客する児童A (右)

(7) 第17時 「なかよしかいをふりかえろう」

交流会を終え、国語科「おもい出してかこう」との合科で振り返り作文を書いた【手だて②】【資料⑳】。控えめな児童Aが「おもわず」手を振った様子は、ペアの年長児への強い愛着と、交流会への想いの強さが伺えた。「はやく二年生になって」と記述したことは、これからの学校生活に楽しみを見出し、前を向こうとする姿とみることができ。児童Aは、スタートカリキュラムの枠を超えて、次の学年へつなげる自信を身につけることができた。この日までに、登校しぶりによる欠席はなく、遅刻も4月の1回のみであった。「学校がすき」と笑い、対象に心を動かしながら、それを誰かに伝えたいという想いと自信をもって、活動することができた。



【資料⑳】 児童Aの振り返り作文

5 研究の成果と課題

(1) 仮説Ⅰに対する手だての検証

【手だて①】…年長までにやってきたことやできることを把握することで、【資料③⑤】のように小学校の学習活動につなげる声掛けができ、1年生にとっても、担任にとっても「ゼロからのスタートではない」ことを自覚することができた。よって【手だて①】は有効であったといえる。一方で、小学校教員の多忙さに気が引けて交流を言い出しにくいと感じる園の先生が多くいることも事実である。年長児のクラスでは、小学校への就学に向けて、生活のリズムを作ったり、給食の配膳を体験したりするなどの「アプローチカリキュラム」を作成し、実施している園もあるようだ。これらの学習内容をより役立つものにするために、小学校の活動の様子を詳しく知りたいと感じている園の先生方も多い。そのため、1年生の担任が自ら声をかけ、こちらから繋がろうとすることが大切である。

【手だて②】…【資料⑤⑥】のような生活指導の場面だけでなく、【資料⑬】のような生活科の学習活動の場面でも、園での学びを小学校につなげる声掛けがしやすくなった。入学してすぐの1年生も、少し前までは園の最年長、エースとして活動してきた子たちである。「10の姿」を知り、学習活動に活用することは、担任にとって「何もできない」ではなく「できることがこんなにある」と感じるきっかけになるだろう。また、子どもたちにとっても「園で頑張ったことが小学校でも役に立つ」という自覚や自信に繋がる。小学校での経験しかない教員が多い中で「10の姿」を指標としたカリキュラムを作成し、残すことは次年度の1年生担任の不安感も軽減することができる。よって【手だて②】は有効であったといえる。今後は、2年生への円滑な接続についても視野に入れながら、3学期の学習内容や方法を検討していきたい。

【手だて③】…本実践ではペアの6年生を固定したり、年長児のペアを事前に決めたりするなど、相手の顔が常に見える環境を作ってきた。【資料㉒】は、2学期末にペアの6年生と交流する児童Aの

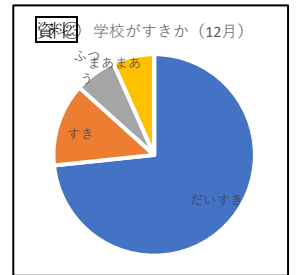


【資料㉒】 クリスマスカード交換児童A

様子である。自分でクリスマスカードを用意し、手渡すことができた。この手だては、児童Aにとって安心感を抱いたり、母親以外の頼れる存在を増やしたりする上で、大変有効であった。一方で、元から人懐っこく明るい子にとっては「いろいろな子と仲良くしたい」という想いを叶えられず「他の6年生と遊んじゃいけないの？」という発言も聞かれた。よって【手だて③】は一部有効で、ペア児童を学期ごとに変えたり、ペアとペアでチームを作ってなるべくたくさんの子と関わる機会を作ったりするなどの工夫をすることで【手だて③】の有効性は増してくるといえるだろう。

(2) 仮説IIに対する手だての検証

【手だて④】…「がっこうとなかよし」の単元では、2つのミッションを設定することで、関心を広げることができた。資料⑩のような掲示を作成し、学習の内容を視覚化し手だてが、男性との関わりに不安を抱きやすい児童Aに「校長先生に会いたい!」という想いを抱かせ、資料⑪のような望ましい姿、気付きにつなげることができた。その結果、2学期末には、資料⑬にあるように「学校がだいすき」と感じる児童を8割強まで、大幅に増加させることができた。



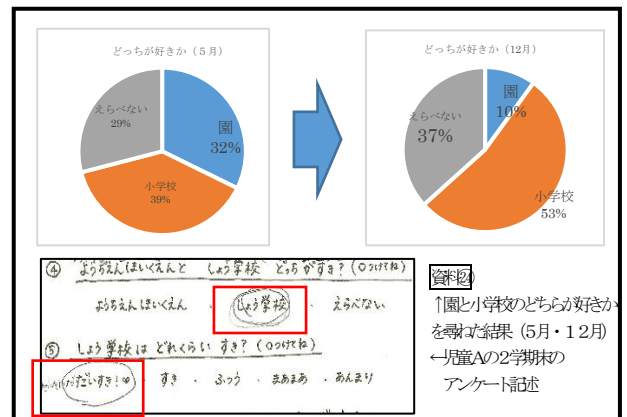
「あきとなかよし」の単元では、秋の「もの」と出会い、まずは自分たちが十分に浸る時間を設けたことで、資料⑭のように対象への理解を深めた姿や「これで遊びたい」という想いを高めることにつながった。年長児という大切な「ひと」と出会う場を設定したことで、資料⑮のような「思わず手を振る」姿や「はやく2年生になりたい」という想いを引き出すことができた。よって【手だて④】は有効であったといえる。今後も生活科の中で「出会いの場」「出会い方」の演出にこだわった単元づくりをしていきたい。

【手だて⑤】…資料⑯のように、控えめな児童Aにとっても、正解がなく、自由や発言の場面とすることができた。また本学級での「鯛」への愛着は強く、2学期に入ると、自らワークシートに「鯛」のイラストを描いて想いを言語化しようとする児童や、他教科でも「音読し…たい!」と発言する児童も多くみられ、心の中にある想いに気付き、手軽に言語化するツールとなった。よって【手だて⑤】は生活科に関わらず、対象への関心を高め、周りの子たちとのコミュニケーションを促すうえでも、非常に有効であった。これらの姿を否定せず、受け入れる担任の言葉がけや学級づくりを、他教科でも継続していくことで「やりたいことは口に出していいんだ」「きっとできる」という自己肯定感につなげていきたい。

(3) 本研究の成果

①登校しぶりの懸念を解消し、学校が好きな子が増加したこと

児童Aは、2学期末まで登校しぶりによる欠席は1日もなく、保護者も「こんなに上手にスタートできるなんて思わなかった」と口にし「学校がすき」と笑いながら安心して登校する我が子を頼もしく感じていた。資料①と資料⑬を比較すると、8割以上の児童が「学校がだいすき・すき」と回答し、3割以上も増加した。また「園と小学校のどちらがすきか」を尋ねると資料⑲、自信をもって「小学校」と回答する児童が増えた。入学当初の児童Aは「えらべない」と回答していたが、12月は「小学校」と回答し「小学校が『だいだい』すき」と、自ら加えて回答する姿を見せてくれた。入学時の不安を跳ね除け「学校がすき」と笑い、安心して登校する姿をみることでできたことが1番の成果であった。



②スタートカリキュラムの共有による、1年生担任の勤務負担が軽減されたこと

今年は、3年目以下の担任が学年の半数いる体制の学年であったが、どのクラスも落ち着いて小学校生活をスタートすることができた。若手の先生や初めての1年生担任をする先生にとっても、春休みの段階から指導の見通しがもてたり、園での学びの上に小学校生活があることを自覚したりすることができた。本実践で実践したスタートカリキュラムを、来年以降も引き継ぎ、加除修正を加えることで、本校の財産にしていきたい。

(4) 本研究の課題

①入学当初の思考や姿の変容の見取りづらさがあったこと

入学当初はひらがなが未習で、能力差も大きく、児童の想いが見える化したり、姿の変容を見取ったりすることに苦しさを感じた。写真による行動記録や対話記録も、担任一人では見取りきれない場面や、見逃している望ましい姿も多くあり、もどかしさを感じた。入学後すぐの姿の変容の見取り方については、再考の余地があると感じている。

②多くのひとや物と出会う単元づくりをする上で、教材研究の労力・負担が大きいこと

本実践で扱った2つの単元は、どちらも校内の職員や近隣園との連携や協力が必要不可欠であった。その分、子どもたちの成長や変容は著しいものであるが、事前の準備や教材研究にはかなりの時間と労力を必要とし、教員の負担はかなり大きい。スタートカリキュラムを指針にすることで、なるべく早い段階から準備を始めたり、近隣園との連携を伝統化し、一から話し合う労力を減らしたりするなど工夫をすることで、負担を軽減する必要がある。多くの成果を生んだこの単元を続けていくことで楽しい1年生の生活科が伝統となり当たり前になっていくように、来年度以降に引き継いでいきたい。